『留学生交流・指導研究』Vol.18 pp.71-83

「祭り」を通じたグローバル人材育成および多文化共生意識の醸成

佐藤 友則（信州大学グローバル教育推進センター）

【要旨】

本稿では、目的達成のための新しい「祭り」に、「グローバル人材育成」や「多文化共生意識の醸成」などの効果が内在されているかを複数の事例をもとに検証した。なおグローバル人材を「異文化を理解し異なる考え方や行動様式を持つ人達と協働して成果をあげられる人材」と定義した。その結果、複数の文化的背景を持つ人々が触れ合いながら形成していく「祭り」を通じ、取り上げた事例の参加者がグローバル人材として成長したことを確認し、「祭り」にその効果があることを示唆した。多文化共生意識の醸成においては、ボランティア・スタッフとして深く関わる日本および外国の大学生、高校生、一般人においてはその効果が認められたが、客として参加する者に関しては効果が限定的だと分かった。今後、多くの人に「祭り」に参画させ、もどかしさ、困難さを感じさせつつ、チームで協働してプログラムを成功させる経験を積ませることが様々な面で有効だと言える。

【キーワード】協働、参加者の多様さ、異文化的発想、プログラム運営、成功体験

１．研究の目的

１）グローバル人材育成と「祭り」

日本では祭りが広く長く行われ、さらに新しい祭りも誕生している。祭りの運営および継続には多大なエネルギーを要するが、それでも日本で盛んに祭りが行われている理由は、日本人が祭り実施によるプラスの影響力を高く評価しているためと考えられる。この祭りのプラスの影響力には、言うまでもなく経済効果や地域の結束力向上、広報効果などが含まれるが、人材育成や意識変化についてはどうなのだろうか。

一方、グローバル人材の育成は、日本の多くの企業、行政組織等で急務となっており、大学にその人材育成が強く求められている。もし祭りづくりという事業運営プログラムにグローバル人材育成の要素があるのであれば、大学関係者も祭りを一過性のイベントとしてではなく、貴重な人材育成の場としてとらえ、それを活用していくことが有効だろう。

なお、グローバル人材の定義には語学力に力点を置いたものからビジネスに特化したものまで様々あるが、祭りという視点で見たうえで重視すべき人材は、自文化と異なる多くの文化に根差した仕事の進め方が混在する中で、自らの意見や希望を他のチーム・メンバーに正確に伝え、説得し、話し合いの中で調整しつつ魅力的な祭りを作り上げていける人材である。そこで本稿ではグローバ

ル人材を「異文化を理解し、異なる考え方や行動様式を持つ人達と協働して成果をあげられる人材」と定義する。

また、祭りは、宗教的な意味合いおよび長い歴史を持つ伝統的なものと、何らかの目的達成のために新たに生まれたイベント的なものの２つに大別される。本稿では、後者の新たに生まれた目的達成のための祭りを「祭り」と記述し、論考の対象とする。

２）「多文化共生意識」と「祭り」

日本語を母語とし日本的な容姿の者が圧倒的マジョリティである日本社会において、いかに優秀であろうと外国人は日本社会への適応に多大なエネルギーが必要であり、十全にその能力を発揮する前に適応不全で日本社会を離れるケースがある。この事象の背景には、日本人同士で日本語を用いた仕事・交流を「良し」とし、異文化的発想をベースにした仕事・交流を本能的に避けてしまう日本人の意識がある。少子高齢化で社会の活力が減衰していくとみられている今後の日本において、外国人と日本人が協働して新たな活力を生み出していく意義は非常に大きい。しかしその実現には、上記の日本人の意識を改め、多様な異文化的発想を柔軟に受入れ、日本的な発想とうまく融合させて活用しようとする意識が不可欠である。本稿ではこのような意識を「多文化共生意識」と定義する。この「多文化共生意識の醸成」に、「祭り」は何らかの貢献ができないだろうか。もし貢献できるのであれば、上述した「グローバル人材育成」要素に加え、さらに大きな意味づけを「祭り」は持つことになる。

本稿では、長野県松本市で６年、6 回にわたり実施されている多文化共生と国際交流の「祭り」が、グローバル人材育成プログラム、さらに多文化共生意識の醸成装置としてどのように機能しうるかについて述べることにする。

２．松本市の「多文化共生と国際交流の祭り」の概要

１）「祭り」の発足

2005 年、長野県の外国籍住民数は 44,726 人とピークを迎え、人口比でみると長野県内の外国籍住民比率は約 2.0％で全国比 1.6％を上回っていた。そのように多くの外国籍住民の存在があったため、ブラジル出身の住民が多かった上田市で「ブラジル田舎祭り」、飯田市で「飯田国際交流の夕べ」、JICA の研修所がある駒ヶ根市で「みなこいワールドフェスタ」などの国際交流の祭りが開催され、多くの市民が参加していた。それに対し、2009 年当時、4,079 人と上田市に次いで県内２番目に外国籍住民が多かった松本市には大規模な国際交流の「祭り」は存在していなかった。そのような状況の改善を目指して 2009 年 12 月に NPO 法人　中信多文化共生ネットワークの理事長（本稿執筆者）と同法人の理事１名、信州大学（以下、信大）の異文化交流サークル「COWIS」の役員３名が会合を持ち、さらに松本市内の国際交流団体や塩尻の NPO 法人等にも「祭り」開始の賛同を得、「こいこい松本実行委員会」を形成して 2010 年６月に「祭り」を実施することになった。本稿執筆者は、第２回、第４回、第５回、第６回の実行委員長を務めている。

なお、祭りの目的は以下の３つと定められた。

① ネットワーク作り（日本人と外国籍住民、外国籍住民同士、国際交流活動に関わる団体同士およびそのメンバー同士）

② 外国籍住民のストレス発散、楽しむ場の提供

③ 多文化共生と異文化に触れることの楽しさを多くの人に周知

その後、松本市中央公民館との共催が決定し、それにより実施場所として松本市の施設である「Mウィング南棟」の全館（6 階建て）を利用することになった。

２）「祭り」づくりの構成員と参加者数

こいこい松本の構成員は、上記「実行委員会」、「メンバー」と呼ばれるボランティア・スタッフ、さらにステージ等で演奏やプレゼンなどをする「出演者」の 3 グループからなる。原則、全て無償ボランティアである。第 1 回こいこい松本の構成員のうち、実行委員は「祭り」に関心のある一般人や外国籍住民などで最終的に 18 名、メンバーは、信州大学、松本大学、松本短期大学の学生を中心に 51 名、出演者は 25 グループだった。その後、「祭り」への関心拡大によりメンバー数は数倍増になった。なお、第 4 回以降は松本市内にある高校の生徒が数多く参加するようになった。

2010 年 6 月 27 日に開始された第 1 回「こいこい松本」は成功裡に終わり、終了後には共催相手である松本市中央公民館の担当者から「この祭りは来年もぜひ実施しなければいけない」というコメントを得た。正確な参加者数は計測していないため、用意したプログラムの残部数と実行委員複数名の意見を元にした概算になるが、上記の祭りの構成員と一般客を合わせ、1,200 名ほどと思われる。人口 23 万人強の中規模地方都市である松本市の屋内イベントとしては、駐車場が有料であることも考え合わせるとかなり大きな数である。

以下、第 1 回から第 6 回までの参加者数を表 1 にあげる。一般客および参加者数は概算である。

表 1

	実行委員 ：人数	メンバー ：人数	出演者 ：グループ数	一般客 ：人数	参加者計 ：人数
第 1 回：2010 年	18	51	25	約 1,000	約 1,200
第 2 回：2011 年	22	148	24	約 1,200	約 1,400
第 3 回：2012 年	29	196	36	約 1,000	約 1,300
第 4 回：2013 年	27	172	31	約 1,000	約 1,200
第 5 回：2014 年	27	185	34	約 1,200	約 1,500
第 6 回：2015 年	33	262	31	約 900	約 1,200

３）「祭り」の運営方針の変化

第 1 回から第 4 回までの運営方針は、ステージ、スタンプラリー、国際交流、料理、総務の 5 部門制だった。実行委員が部門長として各部門を管理・運営し、メンバーはいずれかの部門に所属

していた。各部門の基本的運営方針は実行委員会で議論のうえ策定され、部門会議はその運営方針に従って実際の運営実務を企画・実施する体制だった。

この初期の運営方針に対し、2013 年の第 4 回後に修正意見が提出されて実行委員会で了承され、2014 年以降は「各国の部屋制」という新たな方針で運営されている。韓国、タイ、欧州、モンゴルなどの部屋を作り、柱となりうる外国籍住民を部屋代表とし、メンバーを各部屋所属とした。この新方針と第 4 回までとの最も大きな違いは、各部屋で独自に運営方針を企画・策定・実施するようにした点である。この変化により、外国籍の参加者と日本人参加者とが真剣に議論し、調整しあいながら部屋の成功という目標に向けて取り組む環境が整った。これにより、1 章で述べたグローバル人材育成および多文化共生意識の醸成の場としてこの「祭り」が機能するかというテストが可能になった。

３.「祭り」参加者の多様さ

この章では、こいこい松本の参加者の多様さについて述べる。この多様さが後述するグローバル人材育成や多文化共生意識の醸成と深い関係を持っている。

１）日本人大学生

主要な実行委員の所属が信大であり多くの信大生への広報が容易であること、大学に国際交流に関心を持つ学生が多いことから、「祭り」の発足当初から現在まで多くの信大の日本人大学生がメンバーになっている。また、同じく松本市に拠点を置く松本大学にも積極的に働きかけているため、毎年複数の松本大の学生も参加している。

２）留学生

信大には 2015 年 5 月時点で 329 人の留学生がおり、その中にはこの「祭り」を「自国を松本の一般市民に紹介する機会」と捉えて前向きに活動する者が多く、部屋代表、つまりリーダーとしての役割を果たす者もいる。すなわち、外国人が上位、日本人の一般人や学生が下位というグローバル企業や海外で見られる状況が生まれている。

３）高校生

発足当初から松本市内の高校生がメンバーとして参加していたが、第 5 回以降は 50 名以上が参加するなど、メンバー全体で見ても大きな人数になってきた。高校生は大学生に比べ、参加当初は主体的に動くことは少なく傍観している場合が多いが、自分の置かれている状況、方針などが明確になった後は大きな戦力となっている。

４）日本人一般人

実行委員の多くは日本人一般人であり、「祭り」運営においてリーダーとして活動している。

ア）国際交流、地域の日本語教室などの団体の関係者。イベント運営の経験がある。

イ）学校関係者。大学や高校の教職員など。

ウ）行政関係者。松本市の職員で松本市中央公民館の当イベント担当者など。

エ）イベント運営の経験を豊富に持つ者。

などがおり、当初はア）、イ）、ウ）のみで発足したが、「祭り」の継続と知名度上昇によりエ）も運営に関わるようになってきた。

５）外国籍住民

こいこい松本は日本人と外国籍住民の間のネットワーク作り、さらに外国籍住民同士のネットワーク作りを目的の一つとして開始された「祭り」であるため、発足当初から外国籍住民の参加を重視してきた。そのため、複数の外国籍住民が実行委員、出演者またはメンバーとして参加している。彼らのうち一部の者は、出身国コミュニティのリーダー的存在であり、こいこい松本においても各部屋のリーダーを務めている。

４．グローバル人材育成の貢献検証

この章では、これまで６回実施されたこいこい松本という「祭り」づくりの過程で起きた事例を３つ、一般的な事例を１つ取り上げ、「祭り」づくりがグローバル人材育成面でプラス効果をもたらすかという点に焦点を当てて論述していく。なお、個人情報保護の観点からどの年度のケースであるかは明記しない。

１）Ｉ国の代表Ａ

Ｉ国はこいこい松本発足当初から参加している国であり、ＡはＩ国出身の留学生である。この状況は、Ｉ文化以外の仕事の進め方が混在する中で、Ｉ国人としての意見や希望を日本人メンバーや他の外国人メンバーという異文化の人に正確に伝え、説得し、話し合いの中で調整しつつ魅力的なＩ国部屋を作り上げていく作業と言い換えられる。

こいこい松本の各部屋づくりは、大きく３回の指定準備日および部屋ごとに決める個別準備日により進められる。Ａは第１回の指定準備日にＩ国メンバーと共に集まり、自己紹介をした。Ｉ国メンバーになった信大生は後ほど「最初はＩ国と言われてもあまりイメージがわかなかった。何をすればいいか見当がつかなかった」と述べている。この第１回打合せで、Ａ個人では打開が困難だった「Ｉ部屋の大枠での方針決定」という課題に対し、一般の日本人から「次の集まりでＡさんにＩ国の紹介をしてもらおう」という提案があった。Ａにとっては、年上で人生経験豊富な一般の日本人とのコミュニケーション自体が貴重な機会となり、上記提案や他メンバーとのコミュニケーションによりＩ国リーダーとしての役割を深く自認するようになった。いわば、リーダーのＩ国人が日本人など多数派のサポートを得て協働のきっかけをつかんだという状況である。次回の個別準備日でＡは魅力的なＩ国紹介を行い、それにより全メンバーがＩ国部屋方針を考えられるようになった。また、Ａ自身やＩ国出身の留学生が効果的かつ実現可能な提案をし、それと他のメンバーからの提案を合わせ、次第にＩ国部屋の方針が固まっていった。その過程で在住のＩ国出身者から祭り当日に展示可能な広報物の提案等もあり、Ｉ部屋の構想は着実に魅力的なものに固まっていった。この段階は、Ａが協働のきっかけを情報共有とメンバーとの前向きな「話し合いによる調整」という次

のステップへ確実につなげたものである。AはI国留学生の力を借りながらもI国語だけでやりとりすることはなく、次第に積極的になっていった日本人大学生や高校生の力をうまく引き出していった。

その過程でA以外の留学生も日本人メンバーとの交流を深めた。日頃は同じ大学のキャンパスにいながら留学生と日本人学生が深く接する機会は多くないが、I部屋では「魅力的なI国部屋実現」という共通目的のために文化を超えて両者が協働し取り組む姿勢が見られた。さらにAは、高校生にI国の料理補助や会場整理などの役割を振ることで深く関与させていった。AにとってはBのような一般の日本人同様、高校生とも接触することが稀であり、当初は高校生の主体性の少なさに困惑していた。しかしIは具体的な役割を振ることによって高校生が前向きになるという事実を体感することができた。

祭り当日、I部屋は留学生が演奏、I文字の紹介など前面に立って活躍しつつ、その背後で日本人大学生と一般人が前日の準備から当日まで丁寧に仕事をして運営を支え、高校生が料理補助や裏方の仕事などの役割を主体的に考えながら担当する、非常に協働レベルの高い部屋となった。一般客も多く訪問し、I国の文化に深くふれ、楽しんでいた。A自身のコメントを以下にあげる。

> （この「祭り」を通じて）グローバル人材としても、リーダーとしても成長できたと感じている。日本人とI国人が組み合わさったチームを作っていくこと、それぞれに適した役割をふり、I国を皆に愛してもらうことが僕にとってのチャレンジだった。このことを目的に、自分も知らなかったI国の文化を調べ、皆にできるだけ紹介し、I国部屋をできるだけI国らしくした。祭り当日、僕よりもI国を詳しく説明していた日本人のメンバーもいたし、皆で最初から最後まで作ったので「一つの目的のためのチームに近くなったな」と感じた。

このケースは、I出身メンバーが日本人や他の外国人という異文化グループに情報や意見を伝え、両者が話し合って調整したうえで協働し、魅力的なI部屋実現という成果を挙げた例である。

こいこい松本は「魅力的な○○部屋の運営」という短期目標プログラムの完遂に向けて、多様な背景を持つメンバーが協働して成果を上げられるかが問われる「祭り」である。そのための最も主要な要素はリーダーの存在である。そのリーダー自身、AはI国部屋形成の過程を経て成長することができた。ただし、このケースは、Aのみならず I国部屋の日本人、留学生、高校生メンバー全てが「多様な文化背景を持つ人達と理解し合って協働し、成果を上げ」た点で、グローバル人材として一歩成長した例と言っていいだろう。

２）Ⅱ部門の部門長Ｂ

こいこい松本には複数の部門がある。ステージ部門、料理部門、総務部門等である。そのうちステージ部門が運営するステージは、様々な国・地域の歌と踊り、外国籍住民による日本社会への提言スピーチ、民族衣装のファッションショー等からなっている。このステージ部門の部門長を務めたのは日本人一般人のBだった。Bは大学卒業後、松本近辺に在住しており、こいこい松本には一般客として複数回来て「祭り」の全体像を見ていた。

この部門の構成メンバーには部門長B、副部門長２名、様々なメンバーに加えて「出演者」としての外国籍住民他がおり、彼らとの連絡が重要になる。

この「外国籍住民の出演者との連絡」という点が、通常の祭りとこいこい松本との顕著な差である。いわば、「祭りまで残り２週間だから内容を詰めなければならない」といった時間感覚、「こういう連絡はしておく必要があるだろう」、「リハーサルには参加しなければならない」といった仕事進行の感覚等が日本人と外国籍住民とでやや異なるのである。このように「仕事の進め方」という深く文化に根差した部分での差異があるため、ステージ部門は他の部門よりも意識共有のための時間およびエネルギーが必要だった。しかし実際には、ステージ部門の出演者の参加決定が遅かったこともあり、外国籍住民の出演者の一部が打合せに参加したのは祭り直前のリハーサルからであり、一部の者は当日のみの参加だった。

このケースは、人数的には多数派である日本人の部門長Bが、少数派だがステージ出演者という「重要な立場」にある異文化の人々と、実際に顔を合わせることなくSNSや電話などを用いて協働を深めていけるかがキーポイントだった。

結果としてBは、全出演者との連絡を副部門長や他のメンバーに割り振ることなく一人で担当し、長期間の連絡不能、無断でのリハーサル欠席、当日の曲目変更と音源不良などの大きなトラブルに直面し、その負担を一人で抱えこんで対処に追われることになった。最終的には例年と同様にハイレベルな歌や踊り等が披露され、ステージ部門長としての役割は果たすことができたのだが、「祭り」後の総括でBは多くの反省を述べていた。「担当を決めるなどして連絡を分担制にしてもいい」「「いつまでに何をするかという時間感覚を全員で共有できるとよい」などである。このようにB自身は、自分が外国籍住民の出演者や日本人高校生など「多様な文化背景を持つ人達と理解し合って協働し、成果を上げ」たかという点で疑問を感じた。

このケースは、「祭り」づくりの方針等日本的な仕事の進め方を異文化出身の出演者に電話、SNSなどの遠隔方式で伝え、説得し、それに沿って行動させる、いわば遠隔多文化協働がいかに困難かを示したものであると言える。出演者はメンバーと異なり「チームとしての一体感」を持つ機会が少なく、その意義も感じていない。それだけに「協働」が難しいケースであり、ステージ部門というチーム内での協働がより強く求められたケースでもある。Bが祭り後に指摘した連絡の分担制、時間感覚のチームでの共有などは、「祭り」運営の過程そして終了後にB自身が強く実感し、体得したものであり、今後の人生に生かしていける要素である。よってBのケースは、Aとは異なり、負の面からのグローバル人材としての成長ケースと言えるのではないだろうか。

３）Ⅲ国のメンバーＣ

Ⅲ国もこいこい松本の主要な参加国であり、CはⅢ国部屋のメンバーとして活動した日本人の大学生である。Cは以前にもこいこい松本に参加し有効な仕事をしていた。

Ⅲ国のメンバーは、Ⅲ国出身の外国籍住民である代表、Ⅲ国出身の留学生、他の外国人および日本人メンバーから構成されていた。

CはⅢ国語以外の言語に堪能であり、当初はその言語の国の配置でなかったことが不本意だったと後ほど述べている。メンバーの各部屋配置は当人の希望を聞くことはなく、実行委員会が人数バランス、国籍バランス、メンバーの能力・個性を検討して配置している。よってメンバーが不本意に感じながらその部屋での活動を始めるケースはある程度存在していると予想される。

Ⅲ国部屋の最初の会合は、代表が急にⅢ国語レッスンを開始するという形で始まった。レッスンとはいえ座学ではなく、ホワイトボードに書いた文字をボディランゲージ交じりで、ジョークを飛ばしながら行う楽しいもので、様々な思いでⅢ国部屋に集ったCを含むメンバー達を一気にⅢ国ファンにし、部屋としての結束を高めるのに有効なものだった。Cは当初は代表の流れに乗っているだけだったが、次第に他の日本人大学生、高校生にプラスの働きかけをするようになっていった。一緒に身体を動かすよう働きかけ、遠慮している高校生にも積極的に声をかけていた。

また、資料の作成補助、大学生および高校生メンバーへの連絡などの細かいが非常に重要な役割を担当し、指定準備日３回と個別準備日の間の期間にもⅢ国部屋をまとめる仕事をした。そのため、祭り当日のⅢ国部屋の結束は非常に強固なものになり、全メンバーが楽しみながら自分の役割を果たす魅力的な部屋になった。

Cのケースは、不本意な参加という結束とは遠い状態からのスタートでありながら、Ⅲ国文化という新たな異文化に触れてそれに好感を持ち、理解し、Ⅲ国のリーダーやⅢ国籍住民の不得意な面をサポートするという形で深く協働し、魅力的なⅢ国部屋の実現という成果を挙げた例と言えよう。これもこの「祭り」が「異なる考え方や行動様式を持つ人達と協働して成果をあげ」る機会を提供したために生まれたものである。

４）高校生のグローバル面での成長

高校生は、各部屋の運営方針決定の議論等には、知識不足、消極的姿勢、時間的制約などのために関わることが少なく、初期・中期の準備段階での貢献度はそれほど大きくない。しかし「祭り」当日が近くなって部屋の運営方針が明確になり、それが高校生に伝達され実際に「祭り」の準備が始まって役割を得てからは、自ら考えて問題を解決し、祭り当日は一般客に前向きに対応する者が多く見られる。高校生にはこの「祭り」の場が、実社会に触れ、自分たちの働きが評価され、大学生や外国籍住民、一般人等と触れ合う貴重な場であると認識されている。そして期間は短いものの、通常の高校生活と全く別の場で自主的に活動することが喜びになっている。

さらに、この「祭り」への参加を通して自分の可能性を再発見する者もいる。高校生からのコメントとして「人見知りだと思っていた自分が、たくさんのお客さんの前で堂々と話せることに気づいてビックリした」「初めて外国の人と一緒に仕事した」というものがある。

これらのケースは、一般人や大学生、外国籍住民という異文化混成のチームで、立場的・能力的に積極的になりきれない高校生達が、何度か顔を合わせ時間をかけることで次第に異文化の人達との信頼関係を構築し、役割の指示を受けるという形ではあるが自分の居場所を得ることで前向きになり、協働を可能にしていくケースである。参加する高校の教員は、この「祭り」が高校生達にとっ

て貴重なグローバル経験の場およびボランティアを通じた社会参加の場となっていると考え、毎年高校生達にこの「祭り」を紹介し、多数を推薦してきている。

５．松本市民の多文化共生意識醸成の貢献検証

ここでは、こいこい松本という「祭り」づくりが松本の人々の「多文化共生意識」を醸成させていくことにどの程度貢献しているか、メンバー、一般客、一般の松本市民の３者に分けて論述していく。中規模地方都市である松本市は、静岡県浜松市、群馬県太田市のような集住都市と異なり、外国籍住民に対する関心および意識が高くない。その状況下でこいこい松本という「祭り」は、松本の人々の多文化共生意識醸成にどのような働きをしているのだろうか。

１）メンバーなどに見られる意識変化・醸成

メンバーのうち、日本人大学生、高校生、日本人一般人に焦点をあてて述べていく。

まず、大学生は自分が知っている留学生と共に楽しもう、または留学生の知り合いを増やそうという意識でメンバー申請してくるケースが多い。留学生の知り合いがいない大学生であっても、こいこい松本メンバー申請をする時点で､｢国際交流は楽しそう｣という意識を持っている場合が多い。しかし現実には知り合いの留学生と同じ部門・部屋にならないことや、留学生ではなく外国籍住民が多い部門・部屋に配属されることも多い。

多くの日本人大学生にとって日頃接する異文化対象は留学生であり、外国籍住民との接触は限定的である。そして「留学生は優秀だが、外国籍住民は貧しくて危ない」というステレオタイプを持つ日本人大学生が多い。ところがこの「祭り」では日本人大学生と外国籍住民との協働作業は準備の過程で織り込まれている。その過程で日本人大学生は外国籍住民の実像を知る。中には４章の３）で挙げたⅢ国代表のように、日本語でコミュニケーション可能であり、明るく、リーダーシップがある人もいる。もちろん外国籍住民全てがそのような魅力的な人なわけではないが、部屋を作るために話しあい、巻き込まれながら協働していく過程で日本人学生は外国籍住民の生の姿に触れ、日本と異なる発想、仕事の進め方、楽天性、本番での強さなどを体感する。そのような出会いと協働作業が日本人大学生の多文化共生意識にプラスの変化を生じさせている。祭りの感想としてあげられたコメントを見ても「インドネシアの人達の明るさに触れて、目からウロコだった」、「準備の時は「大丈夫かなー、こんなので」と思ってたけど、本番にはきっちり合わせてバッチリやるから流石と思った」など、これまでの日本的な考え方、仕事の進め方と異なるものに触れ、新たな知見を得た様子がうかがえる。このような経験を通じて、多くの日本人大学生が自らの多文化共生意識を変化させていくと思われる。中には「多文化共生が持つ日本社会発展の可能性」などの新たな意識を持つ者もいる。全ての日本人大学生がこのような過程をたどるとは言えないが、このような意識醸成過程が生じうる仕組をこの「祭り」づくりは内在している。

高校生にとっては日本人大学生との接触も含め、「こいこい松本」参加は全て異文化との接触である。毎日ほぼ同じ時間割・教室・ルールという枠組から解放され、「祭り」の現場で会う人は外

国籍住民も留学生も日本人一般人も全てが、高校生に多文化共生意識醸成の機会を提供している。打合せ参加の初期段階では外国人が話す日本語そのものにも戸惑いを覚え、前向きな参加姿勢は取れないでいた高校生が、約２か月後の祭り当日には任された役割を積極的にこなしている姿を目にする。その間にプラスの多文化共生意識が育まれていることが予想される。この「祭り」を経験した高校生のうち、今後外国籍住民との交流の忌避、疎外に向かう者は多くないと言える。

さらに実行委員として活動するイベント運営のベテランの日本人一般人も、準備段階は外国籍住民との連絡の困難さ、約束に関するゆるい意識、急な方針変更などに戸惑うことが多いが、「祭り」の直前に実際に接してみての明るさや日本語能力の高さ、祭り当日にハイレベルに仕上げる姿勢、本番でのパフォーマンス・レベルの高さ等に日本人にないものを感じ、前向きな意識変化を生じさせる者が多く存在する。その結果、これらイベント運営のベテランが運営する他のイベントにこの「祭り」で知り合った外国籍の出演者が活動の舞台を広げていったケースもある。

以上のように、ある程度の差はあるものの、「祭り」参加によって多文化共生意識は確実に変化し、プラスの意識が醸成されている。

２）一般客に見られる意識変化・醸成

この「祭り」の目的の一つは「多文化共生の楽しさ、異文化に触れることの楽しさを多くの人に知ってもらう」ことである。いわば多くの日本人が持つ、外国籍住民との共生への「抵抗・忌避」を「楽しさ」に変えさせたいと考えている。その視点からこれまで６回の「祭り」の一般客の動向を分析してみると、メンバーや出演者を除いて毎回 900 人を超える一般客が参加している事実は評価できる。どれだけ効果的に広報をしても「こいこい松本という祭りは何か楽しそうだ」と思わなければ人は会場に足を運ばない。実際に祭り終了時点で「楽しかった。来年はいつ？」という声かけが多く、新聞での報告記事も好意的なものが多い。

しかし以前、その「楽しさ」は「多国籍料理のおいしさ」、「見た目の珍しさ」による部分が大きかった。そのため、第５回から方針を変え、大きな１つの料理会場は作らず、各部屋で料理を食べるよう変更した。また、それぞれの部屋に料理以外の体験、つまり文化紹介のクイズ、手で触れられる地図や伝統工芸品等の展示、外国籍住民とのスタンプラリーでのやり取りなどを加えた。つまり、食べる、眺めるだけでなく「多文化に触れる」ことを可能にしたのである。料理提供時間も全ての部屋で同時ではなく時間差で出したために、一般客が料理のある部屋を探して回る、同時に体験するという流れも生じた。もちろん、多くの文化に実際に触れただけですぐに多文化共生意識の変化が起きるわけではないが、料理を食べるだけで見も触れもせずに帰る一般客が多かった第４回までと比較すると、第５回以降は状況が改善されたと言える。具体的には、外国籍住民や留学生に話しかける「前向き、積極的な参加例」が確実に増加した。今後、より深く展示物を見、外国籍住民や留学生と深く親しく接する一般客が増加していき、それらの人々の多文化共生意識にプラス変化が生じることが期待される。

また、参加者数が一定であることから、「こいこいリピーター」という層が存在し、かつ、わず

かながら増加しつつあることが予想される。これらの人々はこれまでの「こいこい松本」で「多文化共生と異文化に触れることの楽しさ」をすでに知り、わずかながら多文化共生意識を変化させ、さらに新たな楽しさ、おいしさを求めて継続参加している層である。この層の人々がさらに周囲の人々に声をかけ、共に「祭り」に継続参加することで、より多くの人の多文化共生意識が変化していくことも期待される。

さらに、「こいこい松本」の特徴は子供の客が多いことである。当然ながらそれら子供の親が国際交流や外国に関心があり、子供は親に連れられてきてスタンプラリーなどを楽しんでいるのだが、近い将来、子供が成長して自らの意思で「こいこい松本」に参加し続け、前向きな多文化共生意識を持っていくことは期待できる。子供は将来の日本社会を背負っていく存在であり、彼らが小中学生のうちから多文化共生の楽しさ、有用性を知り、将来も前向きに多文化共生に関わっていくのであれば日本社会全体の変革も期待できよう。

加えて、松本市民にとって「この祭りの共催に中央公民館が入っている」という印象度は大きい。中央公民館の主体的参加は、「祭り」の権威づけ、広報だけでなく、市役所がこいこい松本に深く関わり支援している姿勢を一般客および市民に見せる結果につながっている。

よって一般客に関しては、メンバーほどでなく限定的ではあるが、多文化共生のプラスの意識変化と前向きな意識の醸成がある程度存在するとまとめたい。

３）一般の松本市民に見られる意識変化・醸成

上述したように「祭り」の参加人数に大きな変化が見られないということは、発足から６年経過しても外国籍住民や国際関係の事象に全く関心を示さない層が存在し、彼らの足は「こいこい松本」会場に全く向かわないことを示唆している。また、参加者数の変化があまりないということは、一度は来てみたがリピーターにならなかった参加者が存在する、同時に「最初から多文化共生の祭りなど興味がない」という人が多いことを意味する。その観点からみれば、「こいこい松本」実施により広く松本市全体や周辺地域の人々に多文化共生意識をプラスに変化させることは成功できていない。少なくとも上記のメンバーほどの成果があげられているとは言えない。「祭り」の知名度、楽しさをさらに上げ、多文化共生に関心がない人でも「あの祭りには行ってみようか」と思わせる工夫が求められている。

６．まとめ

本稿では、松本市で６回にわたって実施されてきた多文化共生と国際交流の「祭り」をもとに、このような「祭り」がグローバル人材育成、多文化共生意識の醸成という面でプラスの影響力を持ちうるかを検証してきた。その結果、大学生や高校生が様々な国籍、文化背景、年齢などを持つ多様な「祭り」づくりの構成員と深く交わり、「祭りの成功」という目標達成志向型プログラムで自らの役割を果たすことでグローバル人材へと成長しうることを示唆した。このことは、今後もグローバル人材育成が強く求められていく日本の大学関係者、留学生指導関係者に、単なる一過性の交流

イベント運営ではなく、「祭り」づくりという数か月単位のプログラム運営事業に注力する意義を伝えている。

一方、多文化共生の意識醸成に関しては、広く一般人の多文化共生意識を変化させるには不十分であったが、「祭り」づくりの構成員においてはプラスの意識変化を確認することができた。一定期間「祭り」に関わる日本人大学生および高校生、一般人にプラスの多文化共生意識を持たせうる点で「祭り」の新たな側面に注視する意義が認められる。

アクティブ・ラーニングの有用性が訴えられて久しく、世界の多くの教育機関で様々なアクティブ・ラーニングの試みがなされている。その試みの一つとして、学内または学外で行われている国際交流の「祭り」を取り上げ、学生をモチベートして参加させ、スムーズに進まないもどかしさ、情報周知や人間関係構築の困難さを感じさせつつ、チームで協働してプログラムを完遂・成功させる経験を積ませることは様々な面で有用だと言えるだろう。

参考文献

麦山亮太・沢津橋紀洋（2015）「外国人集住地域における正／負の接触経験」『地域社会における多文化共生の現状と課題：「松本市の多文化共生に関するアンケート調査」の分析』東京大学大学院人文社会系研究科・文学部　2014 年度社会調査実習報告書

佐藤友則（2014）『多文化共生 8 つの質問　－子どもたちが豊かに生きる 2050 年の日本－』学文社

山地　弘起（2014）「アクティブラーニングとは何か」『大学教育と情報』146 号　私立大学情報教育協会

総務省（2012）「多文化共生の推進に関する研究会報告書　～災害時のより円滑な外国人住民対応に向けて～」http://www.kochi-kia.or.jp/event/tabunka2012.pdf

松本市（2011）「外国籍住民の生活実態に関するアンケート」『松本市多文化共生推進プラン』pp64-99　松本市総務部人権・男女共生課

松本市役所（2011）「松本市多文化共生推進プラン」松本市公式ホームページ『くるくるねっとまつもと』http://www.city.matsumoto.nagano.jp/kurasi/tiiki/jinken/jinken/87014520120820153057152.files/matsumoto_tabnkakyousei_plan.pdf

松本市（2011）「松本市の多文化共生に関する実態調査　(1) 日本人住民に対する調査結果」『第 27 回　松本市公民館研究集会』　松本市教育委員会

菅野佐織（2011）「祭りによる地域ブランド価値共創のフレームワーク　～交流する地域ブランドを目指して～」マーケティングジャーナル Vol.30　No.4

佐藤友則（2011）「松本市の多文化共生と中信多文化共生ネットワーク」『信州大学国際交流センター紀要』http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/suic/upload/pdf/publications/ekiyou_3.pdf

近藤敦（2009）「なぜ移民政策なのか　－移民の概念、入管政策と多文化共生政策の課題、移民政策学会の意義」『移民政策研究』vol.1

今村敬子（2008）「祭りを通した異世代交流の地域共生研究：高齢者世代と若者世代との地域共生を高山祭りの事例研究にみる」『正眼短期大学研究紀要』5 号

平高史也・野山広・春原直美・熊谷晃（2008）『共生－　ナガノの挑戦』信濃毎日新聞社

丹治嘉彦、橋本学（2007）「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレにおける実践の意義について「再生・海そして川から」をもとに」『長岡造形大学研究紀要』4 号

総務省（2007）「多文化共生の推進に関する研究会報告書 2007」
http://www.soumu.go.jp/main_content/000198588.pdf

大槻茂美（2006）「外国人接触と外国人意識 JGSS-2003 データによる接触仮説の再検討」『日本版 General Social Surveys 研究論文集 [5] JGSS で見た日本人の意識と行動 JGSS Research Series No.2』pp149-159　大阪商業大学 JGSS 研究センター